

は、1997年に締結されたNATOおよびロシア間の相互関係、協力および安全保障に関する基本文書（今では過去のものとなったが）の一環としてである。それ以来、NATOの拡大、安全保障上の懸念および統治に関する異なる見解が、ロシア政府と西欧諸国間に緊張をもたらし、進展が行き詰った。

NATO-ロシア理事会

2014年以降、協議および潜在的共同行動のメカニズムであるNATO-ロシア理事会(NRC)は、その機能を果たしていない。しかし依然として、NATOとロシアがシリアの未来について、また同盟国とパートナー諸国双方の脅威であるISISについて討議できる場所ではある。ロシアと同盟国のいずれも緊張が激化することで利益を得ないことから、両者とも、対立するよりもたとえ問題があろうともパートナーシップを取るべきだということとは理解している。

NATO加盟国は、シリア再建を始めるための政治的および軍事的な取り組みをまとめるような詳細な戦略に欠けている。ドイツなど一部の国々では、難民支援が優先事項となっている。フランスなどその他の国々の優先事項は、ISISの軍事力破壊である。米国と英国は両方を目指しているが、軍事または人道的分野のいずれにおいても、実質的な進展は見えにくい。これらの重要な分野で進展を遂げられなかったことに伴う責任はNATO加盟国にあるが、さらにこの事態によってロシアは、様々な「ハイブリッド戦争」に対するNATOの反応を引き続き試し、評価する機会を得た。ハイブリッド戦争とは、ロシアがウクライナとクリミアに介入した後にシリアで磨かれた手法である。これにより我々の関係はどうなるのだろうか。NATO当局者の中では、ロシアが日常的に国際条約や規範に違反し続ける限り「ロシアとは重要な取引は行わない」ことで一般的に意見が一致している。それゆえ、統治と「法の支配」に対するロシアのアプローチ、および東地中海へ向けられた彼らの野心は、西欧諸国にとって長期的な課題となるだろう。

とは言え、米国、英国、フランスおよびドイツは、少なくとも当面は、ロシアを「問題管理」という課題として捉えているようであり、先日の北大西洋理事会でイエンス・ストルテンベルグNATO事務総長が定めた通り、紛争を避けること、そして紛争を制御不能にしないことを優先事項としている。NATOにとっての優先事項は、同盟国間の結束とトルコ領土の保全である。つまり、同盟による危機的状況への対応方法が同盟の主な目的から逸れることがないように、また二国間の小規模な相違や紛争により同盟に傷がつかないように、この同盟が担保しなければならないということである。

NATOは、加盟各国とパートナー各国間において、戦争を発生させない特定の利用条件とプロセスを含んだ危機解決メカニズムの具体化を進めるべきであり、そこでは危機の際にNATO加盟国とロシアが対等に顔を合わせる事となる。とりわけNRCが機能し

ていないことから、このメカニズムにより、特に NATO とロシア間の対話チャンネルが再構築できる可能性がある。もしもこのようなメカニズムが今日存在していたとしたら、トルコはロシア空爆機を撃墜する代わりに、NATO の危機管理システムに問題を提起して領空侵犯への懸念を指摘することができたかもしれない。一年以上沈黙が続いていた対話の席に同盟国とロシアを参加させることができた可能性がある。実際には、この事件により、分断された抑止政策と加盟国・パートナー国間の関与とのバランスを保つ責任が示されているのである。

ワルシャワ会議でシリアの未来について話し合いが行われると予想されるが、その際ロシア問題は避けられない議題となるだろう。しかし、このような小規模の事件を段階的に緩和させる方法がない限り、ロシアと NATO にとって、協力または少なくとも共有する課題と脅威に対し協調をする実際の余地があるかどうかを見極めることは非常に困難となるだろう。

* 本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。